

待降節第三主日
(ルカ 3:10-18)

2012年12月16日
イエズス会司祭 小暮康久

待降節に入り、先週に引き続き、今週の福音でも、洗礼者ヨハネについて書かれた箇所が朗読されます。先週もお話ししたように、洗礼者ヨハネは、「キリストの先駆者」として、救い主イエス・キリストの到来を準備した人物であると同時に、救いの到来を待ち望み続けた「旧約の時代の最後の預言者」を象徴する人物でもあるからです。ルカ福音書では、特にこの点が強調されています。ルカ福音書1章～4章では、①「洗礼者ヨハネの誕生の予告ーイエスの誕生の予告」、②「洗礼者ヨハネの誕生ーイエスの誕生」、③「洗礼者ヨハネの宣教ーイエスの宣教」というように順序立てて語られていますが、これは、洗礼者ヨハネと救い主イエス・キリストの対比、言い換えれば旧約聖書と新約聖書、旧約聖書の救いと新約聖書の救いとの対比を描くためです。つまり、このルカらしい順序立ては、「旧約聖書の時代から人々が待ち望んでいた救いは、洗礼者ヨハネの時までで、すべての人にとっての真の救いは、その期待を遥かに凌駕する形で、救い主イエス・キリストにおいて実現した」というルカのメッセージなのです。

主の降誕を待ち望むこの待降節に、洗礼者ヨハネと救い主イエス・キリストとの対比を思い起すことは、私たちにとっての新約の恵み、「主の降誕」の恵みの大きさを思い起こさせます。

今日の福音では、その洗礼者ヨハネと救い主イエス・キリストとの対比が、「洗礼」ということを焦点にして語られています。今日は、この両者の「洗礼」を比べながら、救い主イエス・キリストが与えてくださった「洗礼」の恵み、その大きさについて、一緒に味わってみたいと思います。

「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。…その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」

ここにおられる皆さんは、…今、洗礼を考えてその準備をされている方々もおられるでしょうが、多くの方々は、幼児洗礼にせよ、成人洗礼にせよ、既に洗礼を受けた方々です。司祭が、「わたしは、父と子と聖霊の御名によってあなたに洗礼を授けます」という定句を伴って、水を注ぐ時、それは、イエス・キリストがみなさんに洗礼を授けたということです。第一義的に、秘跡を執行するのは、イエス・キリストご自身だからです。ですから、皆さんは、今日の聖書にあるように、イエス・キリストから「聖霊」で洗礼を受けたのです。ルカとマタイに共通する言葉資料、いわゆるQ資料は、ここで「火」という言葉を加えていますが、全体の文脈から「火」とは「聖霊」のことですから、マルコ、ヨハネと同様にここは、「その方は、聖霊であなたたちに洗礼をお授けになる。」と理解してよいと思います。つまり、私たちが受けた洗礼は、人間である洗礼者ヨハネが与えた「水による悔い改めの洗礼」とは、根本的に次元が違うということです。

旧約の時代の最後の預言者である洗礼者ヨハネは、罪の赦しを得させるために、悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。(マル 1:4) しかし、それは罪の赦しそのものを与える洗礼ではありません。洗礼者ヨハネの洗礼は、より大いなる恵みの洗礼、イエス・キリストによる罪の赦しの洗礼の序曲でした。しかし、生前のイエスは、この罪の赦しの洗礼を語り、行ったと聖書には書かれていません。それは、すべての人の罪の赦しは、救い主イエス・キリストの十字架と復活という救済の秘儀を待たねばならないからです。それ故に罪の赦しの洗礼については、生前のイエスではなく、復活者イエス・キリストの口から語られるのです。マルコでは、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。」(マル 16:15-16) と語りまします。また、マタイでは、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタ 28:19-20) と語るのです。

復活者イエス・キリストが私たちに与えてくださったのは罪の赦しの洗礼です。教会は伝統的に、洗礼によって、罪の赦しの恵みを与えられると考えてきました。そして大切なことは、ここで言う「罪」とは、赦しの秘跡で告白するようなあれやこれやの個々の罪ではなく、人間にとっての根源的な罪、「原罪」と呼ばれるもののことだということです。罪の赦しの洗礼とは、つまり原罪の赦しの洗礼ということです。

「原罪」という言葉自体、何だか取りつきにくいし、難しい感じがしますね。教会の中では耳にすることもありますが、おそらく多くの一般的な日本人にとって、この「原罪」という考え方は同意できないものかもしれません。「生まれたばかりの純真無垢な赤ちゃんに「罪(原罪)」なんてあるわけないだろう。」と言われてしまいそうです。しかし、救い主イエス・キリストが私たちに与える救いとは、まぎれもなくこの人間にとっての根源的な罪、原罪からの救いに他ならないと、教会はずっと言い続けてきたわけです。そこにこそ、イエス・キリストがすべての人にとっての「救い主」であるということ、言い換えれば、イエス・キリストの救済の普遍性があるからです。

それでは、私たちの人生経験に照らし合わせた時、「原罪」とはどんなこととして考えればいいのでしょうか。もちろん、「原罪」が何であるかと定義することは、「人間」が何であるかと定義することと同じように不可能なこともありません。「人間」の存在がある意味で神秘であるように、私たちの「原罪」も神秘の領域にあるからです。

しかし、聖書の中に登場する「罪」の姿を手掛かりにすると、「原罪」というものの輪郭を自分自身の問題としてイメージできるような気がします。

旧約聖書において、「罪」と訳される言葉はいくつかありますが、その中で重要と思われるものは、① 「חַטָּאת : ハター (名詞)」 語根 חָטָה (動詞) : 「的を外す、間違っただ道に行く、誤りを犯す」、

② 「**אָוּוֹן**アウォーン (名詞)」 語根**אָוַן** (動詞) : 「曲げる、たわめる、逆さになる」、

③ 「**פֶּסַח**ペサ (名詞)」 語根**פָּחַץ** (動詞) : 「破る、逸脱する、背く」、

という三つの言葉です。

例えば、① 「**חַטָּאת** : ハター (名詞)」は、出エジプト記32:31の『モーセは主のもとに戻って言った。「ああ、この民は大きな罪を犯し、金の神を造りました。』』という箇所に見られます。ここには、「的を外す、間違った道を行く、誤りを犯す」といった罪の姿がよく表れています。また③ 「**פֶּסַח**ペサ (名詞)」は、イザヤ53:5の『彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのはわたしたちの咎のためであった。』という箇所に見られます。ここでは神への「背き」という面が表れていますが、これはイエスの受難を預言したと解釈された、有名なイザヤ書の「主の僕の歌」の一部です。1コリント15:3に「キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと」とあるように、救い主イエス・キリストは、私たちの罪のために死んだという初代教会からの信仰は、このイザヤ書の背き (罪) と関係しています。

これらの「罪」のテキストが示すように、旧約聖書における「罪」の本質とは「的を外して、曲がって、逸脱して、背き、主なる神から離れること」として理解されるのです。旧約聖書において、度々「偶像崇拜」が「罪」として言及されるのは、それが、神から離れることにほかならないからです。

新約聖書においても、「罪」と訳される言葉には、① 「**ἁμαρτία** ハマルティア」のような言葉がありますが、これは、先ほどの① 「**חַטָּאת** : ハター (名詞)」「的を外す、間違った道を行く、誤りを犯す」の訳語として用いられるようになったものです。

このように、聖書が語る「罪」を要約するならば、「根源的な次元において、神から離れようとする人間の傾向」ということになるでしょう。神によって創造され命を与えられた人間が、神から離れるということ、それは「死」以外の何ものでもありません。そのような神から離れようとする傾向が、人間の本当に深い次元にあるということです。これが「原罪」ということです。

それならば、救い主イエス・キリストが私たちに与えるこの原罪からの救いとはどういったことなのでしょう。それは次のように表現することができます。「救い主イエス・キリストの愛の業、つまり、十字架と復活の救済の秘儀が、人間の根源的な次元における現実、神から離れようとする傾向、つまり原罪を打ち砕くことによって、人間が再び神との深い絆を取り戻すことが可能となった」そのような救いとして表現できると思います。

私たちが頂いた洗礼の恵み、つまり原罪の赦しの恵みとは、「神との深い絆を取り戻した！」という喜びに満ちた恵みなのです。そして、私たちが、今、「神との深い絆を取り戻している」ということの実証は、私たちがこうして、父と子と聖霊の神を信じ、賛美し、共に主の食卓に預かっているというこの事実です。

確かに、長い人生の中で、私たちは多くの試練に直面します。ペトロや弟子たちのように、嵐が強くなったとき、私たちの信仰も揺れ動くことがあるでしょう。しかし根本的には、私たちは、主イエス・キリストご自身から「聖霊」によって洗礼を受け、その恵みとして原罪を赦され、「神との深い絆を取り戻した」、主によって贖われた者です。そこにはいつも、必要な恵みが注がれています。そして、私たちと神との間には、決して解くことのできない絆が脈打っています。

どんなに苦しくて、もう自分の中に何の力もなく、まるで神に捨てられているような暗闇の中にいる時でも、神はその暗闇の中で私たちを抱きしめています。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と十字架上で叫んだ私たちの主イエスご自身の姿は、その暗闇の中でこそ、深く神と一致することの神秘を示しています。私たちの神は、洗礼によって絆を取り戻した私たちを決して離すことはありません。これほどの恵みが他にあるでしょうか。

旧約の時代の最後の預言者である洗礼者ヨハネは水による悔い改めの洗礼を与えました。しかし救い主イエス・キリストが与えてくれた罪の赦しの洗礼の恵みとは、「神との深い絆を取り戻す」という途轍もない恵みだったのです。

19世紀末の黄昏の中で、哲学者のニーチェは、「神は死んだ」と宣言しました。この世界にもはや神の居場所などないと。確かに、その後の高度な科学技術の発達は、神を排除した人間中心の、物質主義的な世界観を生み出し続けているようにも見えます。だからこそ、この現代において、どれほど多くの人々が、魂の底では「神から離れていることの苦しみ」を感じて生きていることでしょう。

そのような苦しみを抱えて生きている人々のためにこそ、今年もまた、私たちの救い主は来られるのです。その人たちとの「深い絆を取り戻す」ために！私たちは既に、主の洗礼によって、無償の恵みによって、この絆を取り戻していただいたことを信仰において知っています。だからこそ、主の降誕を待ち望むこの待降節に、一人でも多くの人々が、救い主イエス・キリストと出会い、「神との深い絆を取り戻す」ことができるように、心の底から祈りたいと思います。